



長年の功績に栄誉

～叙勲・褒章受章～

このほど叙勲・褒章が発表され、本市から10人の皆さんが受章されました。ここで、受章された7人(3人は掲載を辞退)の経歴とコメントを紹介します。



秋の叙勲



瑞宝 教育功労 70歳
江連 岳雄 氏

子どもたちと 過ごせることが とても幸せ

昭和44年から埼玉県の小学校に2年間勤務。その後地元に戻り教壇に立つ。平成12年～16年まで旧塩原町の教育長を務めた後、教育現場に戻り平成19年に退職。現在は、学童保育の学習指導員として多忙な日々を送っている。

「今回の叙勲は本当に晴天の霹靂でした」開口一番に受章の喜びを語ってくれた人見さん。長年に渡り、主に中学校で教鞭を執ってきた。在職中は、ソフトテニス部の顧問をずっと続けてきた人見さん。常に全国大会を目指して指導をしてきたとか。「生徒たちには目標を意識させる指導を心掛けていましたが、子どもたちには、厳しい先生と映っていたようです」そう苦笑いしながら話す人見さん。「でも、今回のお祝いをその子たちがやってくれたんです。教師冥利に尽きます」と、とても嬉しそうに話してくれた。



瑞宝 教育功労 70歳
深谷 哲 氏

子どもたちのために 精一杯やりきる

昭和44年から山形県の中学校に2年間勤務。その後、地元へ戻り32年間教鞭を執ったのち、平成15～17年に旧西那須野町教育長を務めた。現在は、放課後児童クラブで子どもたちの成長を見守っている。

教え子たちとの 変わらぬ交流が宝物

昭和42年に教員となり、平成16年に退職。同年4月に旧塩原町の教育長に就任。同年12月に市町村合併により退職。その後は、裁判所の調停委員を10年務め、現在は引き続き参与員として活躍中。



瑞宝 教育功労 73歳
人見 政昭 氏

「目の前の子どもたちのために、無我夢中で生きてきた」と振り返る深谷さん。教師としての生き方の土台を作ったという中学時代の恩師の背中を追い続け、どんなときも生徒や保護者と本気で向き合い、彼らの思いや願いを全力で受け止めてきた。在職中は、受け持ったクラスの子どもたちと日記を毎日やりとりし、教え子との心の交流を最も大切にしてきた。「生徒たちの生きてきた歴史に関われることが何より幸せ。これからも子どもたちとふれあい続けていくことが、自分にとっての生きがい」と語ってくれた。

知的障害者の社会復帰支援のために、施設職員として陶芸や果樹栽培などの指導を行ってきた小高さん。

「まさか自分が選ばれるとは夢のよう」と受章の喜びをかみしめていた。「いつも利用者さんと同じ目線に立って、ただただ一生懸命にやってきました」と語り、小高さんはどんな時も利用者さんと対等であることを心がけ、ともに助け合ってきたという。

今でも退所した利用者が訪ねてくることがあるそうで、「社会に出て元気に働いている姿を見ると嬉しい」と半世紀にわたる長い月日を振り返り、感慨深そうに話してくれた。



瑞宝 社会福祉功労 75歳
小高 忠明 氏

利用者と助け合い 生きてきた半世紀

昭和38年から、社会福祉法人「慈生会」が運営する知的障害者施設「光星学園」、「マ・メゾン光星」で50年以上指導員として勤務してきた。現在は、シルバー大学のOBとして陶芸など部活動を楽しむ。



瑞宝 消防功労 71歳
鈴木 康之 氏

常に命の最前線に 立ってきた41年

昭和41年に黒磯消防署に入り、その後41年間にわたって常に現場の第一線で活躍。平成19年に黒磯那須消防組合消防司令で退職した。現在はボランティア活動と趣味の木工作品の制作に励んでいる。

「燃えさかる家に残された3人の我が子を救おうと、炎に飛び込もうとする父親。嗚咽を漏らし、消防士の制止を必死に振り切ろうとする姿は今も目に焼き付いています」。柴宮さんは駆け出しの頃をそう振り返る。自らの命を顧みず、家族を救おうとするその光景から、あらためて命の尊さを教えられたという。

「放っておいては亡くなってしまいう命を一人でも多く救いたい」その一心で42年間、命の現場に立ってきた。今回の受章に際し、同僚や後輩、何よりも一番近くで支えてくれた家族への感謝を話してくれた。

秋の褒章



藍綬 褒章 社会福祉功績 77歳
田口 三知子 氏

伝えるべきことを 伝えられる強さ

平成7年に民生委員となり、21年間活動。また、在職中6年間は市民生委員・児童委員協議会の会長を務めた。現在は民生委員の活動は後進に託し、市社会福祉協議会会長として活躍中。

長年に渡り民生委員として地域の人たちを見守ってきた田口さん。彼女が担当した大山地区には、約5千人が生活している。

元々は下永田地区で独り暮らしの高齢者訪問などの活動をしていた田口さんは、民生委員の先輩に後押しされ、民生委員として活動を始めた。「自分が不安に感じていると、余計相手を不安がらせてしまう。言いにくいことでも、伝えるべきことはきちんと伝える。そう自分に言い聞かせて活動してきた」。そう当時を振り返る彼女の眼には、厳しくも優しい光が宿っていた。

一人でも多くの 命を救いたい

昭和44年に東京消防庁に入庁し、その後都内7つの消防署で勤務。平成23年に深川消防署消防司令で退職し、本市へ移住。現在は民生委員や自治会評議員など7つものボランティアに勤しんでいる。



瑞宝 消防功労 67歳
柴宮 憲二 氏

「忘れられないのは入署直後に起こった木ノ保用水の隧道事故。右も左も分からない全くの新人でしたが、命を救う現場の壮絶さを学びました」現場一筋で41年間を勤め上げた鈴木さん。那須水害、ブリヂストン栃木工場の火災事故でも第一線で指揮をとってきた。「最近も那須岳雪崩事故など災害がなくならないのが心配」と、退職した今でも地域を案じる胸の内を語ってくれた。「今回の受章は地域の皆さんと家族の支えのおかげ」。そう語る彼は、恩返しとして、民生委員・学校支援ボランティアとして活動している。